



Title	「包む」の授業：教材への主体的関わりを大切にした説明的文章指導
Author(s)	金田, 昭孝
Citation	札幌国語研究, 2: 77-85
Issue Date	1997
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2606">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2606</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

# 「包む」の授業

―教材への主体的関わりを大切にしたい説明的文章指導―

金 田 昭 孝

はじめに

説明的文章の指導は難しい。

まず、その教材で生徒にどんな力をつけるのか。技能的な指導項目、価値的な指導項目、その教材の特質からどんな指導要素を取り出して授業を組んでいくのか。考えることは多い。

また、その教材を学習する興味や関心をどのように湧かせていけばよいのか。書かれていることがらに興味のある生徒もいれば、全くない生徒もいる。生徒が学習を進めていく上で、学習をする動機付けがあるのとないのでは追究意識が大いに異なる。生徒が興味を持っていなかったり、普段考えていないようなことに、どのように学習のきっかけを与えていくのかなど、説明的文章を指導する上で苦勞することは多い。

やまだようこ著『包む』が、平成五年度より教育出版『新版中学国語2』に掲載された。私は、平成五年に一度指導をした

が「何と難しい教材なのだろう。」と思ったまま指導を終えた経験がある。当然生徒の反応も芳しくなく、多くの子は表面的な理解にとどまり学習を終えたのではないだろうか（もしかするとほとんどわからずに、学習を終えたのでは……）。

今年度（平成八年度）、二学年の指導が再び巡ってきた。この「包む」の研究授業を行うことになった。そのため、多くの先生方とこの文章について教材研究をする機会に恵まれた。また、その中で自分の授業の進め方についても振り返ることができたのである。

そこで本稿では、「包む」の教材研究および授業実践について述べ、少しでも生徒が教材に主体的に関わるような指導の在り方について考えてみたい。

## 一 教材のおさえ

本教材の要旨を次に述べる。

日本の伝統的な「包み」の多くは、気の遠くなる年月に

わたって受け継ぎ、洗練されてきた、無名の人々の知恵と美意識の結晶である。だが、それらの多くは私たちの生活から急激に姿を消しつつある。が、よく考えてみると、包みにこだわる伝統は、現代の若者の中にも根強く生きていくように思われる。日本文化では、「心」は、「身」の中に包まれた中身として認識されるのである。よって、本当に大切なものは、何かの中に包まれていたほうが自然で安定していると感じられるのである。

本教材は、日本の生活の中にある伝統的な「包む」という行為をとらえながら、その中に秘められている「日本人の心理構造」を述べた文章である。数多くの日本文化論がある中で、「包む」という観点から述べたものはないへんユニークである。

「包む」という行為を我々は、普段何気なく行っている。中学生である生徒達にしてみれば、なおさらのことであろう。この文章を学ぶことにより、それが「日本文化」や「日本人の心理」に結びついていることを知り、生徒達は新たな発見をすることであろう。

筆者やまだようこ氏は、「自作を語る『包む』を書いたころ」(月刊国語教育 一九九五年五月号)の中で次のように述べている。

地球は多文化で成る。それぞれの文化には長所も短所もある。実態を等身大で理解し、相互に対等につきあう志向性はまだ弱いのかもしれない。明治以来の『進んだ西欧文

化にあこがれる』向学心に、『日本文化』への劣等感や自己卑下が裏打ちされていないか気になる。

「包む」の文章の中で、単純に「日本文化の再評価・日本文化礼讃」が述べられているわけではない。しかし、西欧の生活様式や文化がいたるところに入り込んできている今日、生徒に日本の文化について改めて見詰め直すきっかけを本教材は与えるものと考ええる。

このようなことから、本教材は「学習指導要領」の「B理解・二学年」の指導事項である「イ、話や文章の内容に含まれているものの見方や考え方を理解し、自分の見方や考え方を広くすること。」に適していると考えることもできる。すなわち、生徒達は、普段はあまり関心を持っていない日本文化について考え、自分のものの見方を広めることができるのである。

次に、本教材の文章構成を明らかにする。

この文章は、二十三の形式段落より成る。内容の上から、大きく次の四つの大段落に分ける。

I、『形式段落1から6』

「日本の伝統パッケージ展」を見て

II、『形式段落7から13』

ふろしきの思想について

III、『形式段落14から18』

現代の若者にも見られる「包む」文化の伝統

IV、『形式段落19から23』

包む行為と日本文化における心

筆者は、自分が実際に見た「日本の伝統パッケージ展」での感想で話を切り出し、「ふろしきの思想」、「現代の若者に見られる『包む』文化」を具体例にし、最後に「包む行為と日本文化における心」ということでまとめている。したがって、I段落を「序論」、II、III段落を「本論」、IV段落を「結論」と押さえることも可能であろう。

この構成と合わせて、文中に用いられている「心（こころ・しん）」、「心理」という語句に注目してみた。この文中には「心（こころ・しん）」、「心理」という用例が九例見られる。それは、I段落に二例、IV段落に七例見られ、II、III段落には見られない。「本論」として具体例が述べられているII、III段落に見られず、「序論」と「結論」であるI、IV段落に見られる「心」「心理」はこの文章を抽象レベルで括っているひとつのキーワードと言って良いと考えられる。

筆者やまだようこ氏は言語心理学者である。このことから、「心」という語句がこの文章を読み解いていくときのひとつの鍵であると言つてよいと思う。「日本文化」と「心」の問題が、この文章の中では密接に結び付けられて述べられているのである。

以上のことから、本教材においては、日本文化について改めて考え直すきっかけを生徒に与えることができる。それとも

に、「包む」という行為をする「心」を見詰め直させることができる。そうすることによって、狭くは自分たちの日常における「包む」の意味、広くは世界の中の日本人としての「包む」の意味までも生徒に考えさせることができるのである。

## 二 指導計画

第一節で述べた教材のおさえに基づき、次のように学習目標を設定した。

- ① 伝統に対する筆者の思いにふれ、日本の文化について考える。
- ② 文章の展開をとらえ、筆者のものの見方や考え方を理解する。

また、授業後に期待する生徒の姿を次のように描いてみた。

- ① 「包む」という日常の何気ない行動について、考えてみようとする。
- ② 筆者自身の「包む」に対する思いを読み取ることができよう。
- ③ 「用の美」の意味を説明することができる。
- ④ ふろしきとふとん、部屋、和服との共通点を説明できる。
- ⑤ 日本ではなぜ「包む」ことを大切にしてきたのか説明することができる。

⑥ 日本文化について自分なりの考えを持ち、それを四百字から八百字程度で表現できる。

以上のような期待する姿を具現化するために、次のような指導計画を考えた。

第一時～題名「包む」について考える。……学習活動A

「包む」の全文を読む。

一次感想を書く。

第二時～全文を四つの大段落に分ける。

難語句を辞書で調べる。

第三時～I段落の読み取り①

「用の美」についてまとめる。

第四時～I段落の読み取り②

筆者の思いにふれる。……学習活動B

第五時～II段落の読み取り

「ふろしきの思想」について読み取る。

第六時～III、IV段落の読み取り

「若者文化の例」を読み取る。

「日本で『包む』ことを大切にしてきたわけ」を考える。

第七時～日本文化についての自分なりの考えを四百字から

八百字程度で文章にまとめる。……学習活動C

この指導計画の中で、「学習活動A、B、C」を特に生徒が教材に主体的に関わる学習活動と考えた。以下次節において、授業の実際を述べることとする。

### 三 授業の実際

まず、「学習活動A」についてである。

「学習活動A」は、生徒が普段何気なく行っている「包む」という行動について考えるきっかけを与えるための活動である。したがって正解があるわけではない。生徒には日常生活を振り返らせ、自由に考えを発言させた。こうすることにより、各自が問題意識を持ち、読み進めていこうとする雰囲気をつくろうと考えたのである。

生徒への問い掛けは、「包む」という題名の文章をこれから学習しますが、みなさんはどんな時に「包む」という行動をとりますか。また、なぜ包むのですか。各自思い付いたことをノートに書き出しましょう。」である。

五分ほど時間をとり、周囲の子と交流したあと、クラス全体での発表となった。次のような発表があった。

「おにぎりをお弁当にする時に包みます。おにぎりがきたなかならないようにです。」

「包丁を買って家に持ってくる時です。理由は危ないからです。」

「プレゼントを渡す時です。見た目をよくするためにです。」  
「同じくプレゼントですが、理由が違います。中身が見えて

しまうと楽しみがないけれど、包んで中身が見えないと、開ける楽しみがあります。」

「お金をもらう時、お年玉など包んであります。きっと中身が見えないようにだと思えます。」

「ガラス物を引っ越して運ぶ時です。こわれやすいので包むのだと思います。」

「お弁当箱を包みます。ひっくり返したりすると、こぼれたりよごれたりするからです。」

「宅急便などはしつかり包んでいます。くずれたりしないで運びやすいようにするためだと思います。」

生徒達は、思った以上に積極的意欲的に考え、日常の「包む」を意見として発表していた。「包む」について考えてみようとするひとつのきっかけはできたように思う。また、教材への興味も高められたと考える。

次に、「学習活動B」について述べる。

「学習活動B」は、筆者の思いにふれるねらいで設定した。

I段落の読み取りにあえて二時間を費やした。それは、次の理由による。

一般的な説明的文章の読み取りであれば、指導計画の第三時のみで十分である。しかし、この文章の特質を考えた時、「日本文化の心」に強い興味・関心を筆者自身が持っていることをおさえなければならぬ。そのことが本教材の最後の一文「本当に大切なものは、裸でむき出しよりも、何かの中に包まれて

いたほうが安定していると感じられるのである。」につながる。なぜならば、「感じられる」というのは、「心」のレベルの問題であり、そう「感じる」ためには筆者の日本文化に対する「思い」を抜きにはできないからである。このようなことから、「序論」とも言えるI段落で、要点をおさえるだけでなく、筆者の思い・心の在り様を考えさせることにしたのである。そして、授業展開においては、筆者の思いを文中の言葉から確実におさえるとともに、生徒個々の自分なりの読みも大切にし、教材に主体的に関わらせようと考えた。

次に、この時間で扱った教材文の一部を提示する。

いつか旅に出たいと願いながらも、このごろはどこへ行くにも仕事ばかりで、しかも交通が便利になったぶんだけ、日帰りのとんぼ返りが増えた。そんな、心が亡くなってしまいうように忙しい日々の暮らしの中で、列車を待つひとときに、ささやかな時間のすきまをいとおしむようにのぞいた美術館で、「五つの卵はいかにして包まれたのかー日本の伝統パッケージジ展」に会期終了まぎわにめぐり会えたのは、本当に仕合わせであった。

「包む」ということは、日本文化の心理を表す重要な概念の一つだと思うようになってからずいぶんたつが、長年にわたって世界各国で展覧会を開いてこられた岡秀行さんという方がいらっしやることを初めて知った。また、外国での展

覧会の名前が「Tutumu」という動詞形で名づけられていたのも、わたしにはとりわけうれしかった。なぜなら、展示したり鑑賞したりできるのは「包み」になった物でしかないが、本当に大切なのはできあがった物ではなく、現在形で表される「包む」という人間の行動だからである。文化とは、日常生活から切り離して特別に飾られる過去の物ではなく、今ここで生きて動いている人々の暮らし、日ごろなにげなくやっている行動そのものなのである。

展覧会には、すしや菓子の木箱、みそや酒の樽、香辛料やようかんの竹筒、魚やもちの竹皮や竹かご、ちまきやだんごの葉包み、縄の巻き柿や納豆つと、米や炭の俵、酒とつくりや漬物かめ、におい袋や紙袋などが展示されていた。それらの多くは、ふだん身近にあるなじみの物ばかりだから、改めてしげしげながめることは少ないが、こうして一堂に並べてみると、それらに一貫して流れているシンプルな美しさと静かで確かな存在感に、息をのむほどであった。

(以下 略)

授業は次のように展開した。

まず、「展覧会に来て、筆者は（ ）気持ちになった。」と板書し、（ ）に入る言葉を考えながら音読を聞かせた。ねらいとしては、筆者の気持ちについて考えるという読みの構えをつくることと、筆者の「仕合わせ」という気持ちを導き出し「筆者はなぜ仕合わせな気持ちになったのか。」という本時の学習課題につなげることにある。その結果、生徒からは「うれしい」

という反応が多く返ってきた。「仕合わせ」というのはどちらかというところ、少数であった。これは、問い掛けが「展覧会に来て、」とあったため、実際に展覧会の中に入っている気持ちを述べるべきだと生徒がとらえたためと考えられる。また、「仕合わせ」という表記が生徒に馴染みが薄かったためとも考えられる。「幸せ」であれば、もう少し反応が多かったかも知れない。

ここで生徒の目を「仕合わせ」という言葉に集中させて、「みんなだったら、日本の伝統パッケージ展に来て、仕合わせだと感じるだろうか。」と聞いてみた。ほとんど全ての生徒はそう感じないと答えた。日本文化についての関心が薄く、この文章で出ている木箱や樽などといった具体例にも馴染みがない生徒の実態から、予想どおりの反応だった。

「仕合わせ」の感じ方は人によってちがうのだということも、数名の生徒に「どんな時に仕合わせか。」と聞いて確認した後、「筆者はなぜ仕合わせな気持ちになったのか。」という学習課題を設定した。そして、「筆者が仕合わせだと感じている中身をまず探そう。」という方法を提示した。一人一人教科書を再度よく読みながら、その表現を探していった。

十分ほど各自でノートにまとめる時間をとった後、答えを発表させた。その結果、次のような反応が返ってきた。

「外国での展覧会の名前が『Tutumu』という動詞形で名づけられていたのも、わたしにはとりわけうれしかった、とあるのでこの部分が仕合わせの中身だと思います。」

「日本文化に関心を持った岡秀行さんというかたがいらっ

しやることを初めて知ったことが仕合わせの中身です。」

「改めてしげしげながめることは少ないが、と書いてあるの  
で、ここではじっくりとながめていて、時間をかけて細かいと  
ころまで見れることが仕合わせなのだと思います。」

「一貫して流れているシンプルな美しさと静かで確かな存在  
感に、息をのむほどであった、とあるので、展示しているもの  
の美しさで仕合わせな気持ちになっっていると思う。」

「会期終了まぎわにめぐり会えたのは、本当に仕合わせであっ  
た、と書いてあるので、前から見たかった展覧会を見れたこと  
が仕合わせなのだと思います。」

予想された反応は、ほぼ生徒から返ってきた。中には予想し  
た以上に細かく読み取っている生徒もいた。意欲的な課題解決  
が見られたが、指導者として、私自身、これらの反応をどうま  
とめるかということが課題として残った。

そして授業の最後に、本時の学習のまとめとして「筆者は日  
常的にどんなことを大切にしている人だろうか。」とここから  
読み取れる筆者像を生徒に書かせてみた。個々の読み取りを大  
切にし、自分の言葉で筆者をとらえさせたいと考えたからであ  
る。以下に、生徒の反応例を載せる。

「日本文化を大切にしている人だと思う。この展覧会のもの  
すべてから日本の昔の人々の苦労や知恵が見えてくると思っ  
た。この筆者はそんなものにひかれ感動したのだから、やはり  
日本の文化を大切にしている人だと思った。」

「ふだんの人間のなにげない行動などひとつひとつを大切に

し、それを文化に基づいて考えている人。「包む」という言葉  
を通して、人々が忘れかけていたものを取りもどそうとする  
人。」

「何気なくのぞいた展覧会を見て、筆者はとても仕合わせと  
感じた。しかし受け取る人によつては「ただのパッケージ展な  
んてつまらない。」と取る人もいると思う。だがそんな中でも  
筆者は忙しい毎日から切り離されたそんなひとときをとっても感  
動できるすばらしい人だと思います。」

「物より昔の人が考え出した知恵など、文化を大切にしてい  
る人。また、好きということもあるが、日本の伝統パッケー  
ジ展にめぐり会えたことを本当に仕合わせであったといっている  
ので、小さなこともすぐ喜び、しあわせと思うのも大切にして  
いる人ではないかと思った。」

学習活動Bを行うことによつて、生徒は自分なりに自分の言  
葉で筆者像を描き、筆者の思いについて考えを巡らせることが  
できた。そして、ここでの「仕合わせ」の読み取りが、最後の  
部分の「自然で安定」に結び付いていったように思う。

最後に「学習活動C」について述べる。

「学習活動C」は生徒がこの「包む」という教材で学んだこ  
とを自分でまとめ、自らの言葉で表現する学習である。すなわ  
ち、学んだことをもとに、自分なりに日本文化、西欧文化につ  
いて考えたことをまとめさせたのである。授業の初めに次のよ  
うな文章を書いたプリントを配布した。



「包む」で筆者やまだようこ氏は、最近失われてきている「日本の包む文化」についての見直しをしていました。日常的にあまり考えていなかったことを学習したのではないのでしょうか。

日本には昔から伝統的に受け継ぎ洗練されてきた様々な文化があります。それは「ふろしき」や「米俵」のように形のあるものもあれば、「つつしみ」や「つつむ時の気持ち」のように目に見えない物の考え方のようなものもあります。私たちが普段気付かないような優れたものの中にはあるでしょう。

今二十一世紀を目前にして、これからますます国際化の時代になるだろうと言われています。外国の人と協力していくことが今まで以上に必要になるといえることです。そのような時代を私たちは生きていかなければならないのです。では、その時代を目前にして私たちはこの『伝統的な日本文化』についてどのように考えていけばよいのでしょうか。考えやすくするために、「日本文化が失われていくのを防ぐため、これからは大切にすべきだ。」とする考えを『日本派』、「日本文化が失われていくのはやむをえないことで、西欧などの文化をこれからもどんどんたくさん取り入れるべきだ。」とする考えを『西欧派』とします。あなたはどちらの立場に立ちますか。自分の立場をはっきりさせて、自分の論を展開してみましょう。

次に、生徒の作品例を紹介する。

日本派か、西欧派か。私は、日本の文化も西欧の文化も、うまく取り入れていけたらいいと思う。ただ、日本文化が失われていくのは、良いこととはいえないと思う。私たちの年代は、日本文化とはどういうものなのか、よくわからない。ピンとこない。それは、日本文化が少しずつ失われている証拠だと思う。もし、日本文化がなくなり、西欧文化だけの世界になってしまったら、日本は外国から、「なんて個性のない国なんだ。」と否定されると思う。

確かに、日本文化は今の私たちの生活からは遠く離れた存在で、なくなっても困ることはない。イメージ的にもあまり良い印象はない。ふろしきはダサイ。着物はめんどうくさい、つかれる。昔の日本の家の造りは見なくなり、西欧風の家を多く見る。ふとんを押し入れにしまい、ちゃぶ台を出せば、寝室、食堂、居間と変わった日本の家も、今では寝室にベッド、食堂にテーブル、居間にソファと昔の日本の家とは全くかけはなれてしまった。

しかし、このまま西欧文化に流されていいのだろうか。そんなようでは、日本は恥ずかしい国になってしまう。日本の文化は、世界でも高い評価を得ている。日本人でも知らないような日本の芸術的な文化に触れ、感動し、それを職業にがんばっている外国人もいる。その自分たちの国の文化を私たちは遠ざけ、西欧のものに憧れ、本来誇りに思

うはずの日本の文化に背を向けている。

もっと日本文化をみとめてほしい。そして、大切にしてほしい。一人一人がそういう気持ちを少しでも持っていたら、日本文化は失われずにすむと思う。

私たちが社会に出る頃、日本文化はどのような形で私たちに触れるのだろうか。それは全く予想できない。

生徒個々、自分なりの日本文化論を原稿用紙に綴った。今ままであまり考えてもいなかった日本文化について、自分の考えを多少なりとも持つことができたのではないかと思う。文章をただ読み取って終わるのではなく、学んだことを基に自分の言葉で表現する学習活動を持つてこそ、学習はより主体化される。説明的文章の学習を、より「能動的な学習」へと変えることができる。

しかし、文章がなかなか書き進まない生徒がいたことも事実である。「自らの言葉で表現する」ための書き方の指導にもより力をいれなければならないことを感じた。

### おわりに

以上で、「包む」の教材研究および授業実践の報告を終える。本稿では、教材に主体的に関わる学習活動の部分を中心に述べたため、「確かな読み」の指導についてはあまり述べることができなかった。しかし、主体的に読むためには、「確かな読み」がその前提としてなくてはならない。「確かな読み」の上に立

ち「主体的な読み」が育っていくものと考えるからである。

その「確かな読み」の指導も難しい。工夫をしないと、生徒にとっては、難しい内容であったり、意欲がなかなか湧かない内容になりがちなのである。この点についても、今後の自身身の課題とし、実践に励みたい。

### 【参考文献】

- ・『中学校国語教材研究大事典』  
(国語教育研究所編 明治図書 一九九三年刊)
- ・落合賢一氏執筆 「包む」の項
- ・『授業づくり』に役立つ 新中学国語教科書研究  
(大西忠治・阿部昇・科学的「読み」の授業研究会編 明治図書 一九九三年六月刊)
- ・片桐昌昭氏執筆 「包む」の項
- ・『学び合う喜びのある国語科授業の展開』  
(北海道国語教育連盟編 一九九三年八月刊)
- ・山下利夫氏執筆 「包む」の指導